早蕨やふときは野邊の燒はより　同
京に一重たちおくる〳〵や八重霞　不及
座論にやまけし綸旨の梅の花　常成
花入の竹はさしかやこめ柳　同
土筆の汁はみそれはかまかな　同
めくむはゝ鳥乃玉子の楓哉　安次
火をとぼす花にや人を夏の虫　常成
親のもたす子心なれや花の雨　同
月花をすがば心得よ歌のみち　同
花にみとれたつ期もしらそ山路哉　同
あわてあれ陰陽師より花に風　同
木の目にも佛はありや普賢像　同
義經にみたや鞍馬のちご櫻　同
花も色にうつめにけりな夕霞　玄旦
大海やちるをゑしらぬさくら鯛　同
花衣みなそれ〳〵の木たけかな　催笑
花さかは付人とのふや鈴れ繩　同
寄る年はそかたの花の嵐哉　同
みすてぬはわびても花のれちめ哉　同
火櫻の花のつはみはたゑんかな　同
花かでもみつはくみけりうは櫻　直久
立かぬる花にしびりやきれかやつ　同
桃色の花見に袖やひねなたち　同
花をうしとそつるはもうに違ひ哉　賴勝
うす霞引やもみすり米さくら　同
うは櫻と名にこそ立つれつはひ花　云拙

はへ付やひへもつき木のいぬさくら　索嘲
花をみる目よりやはれぬきりかやつ　政長
あらそはゝ梨花にもまけぬ緋桃かな　直久
吹をとす風は守屋か大子桃　玄旦
半季居か雁と出かはるつはくらめ　政長
親と子もすたつ雀や遠軒端　直久
雉の聲けしけんさりと春野哉　同
羽杖つく雉の立居やつかれ鳥　同
山林にすむはけんなり雉子の聲　心狹
歌よむは心いたいけの蛙かな　正盛
春の野や春景燒かつぼすみれ　常成
はてしなのみてし心やあつま菊　同
花みては氣もはうしけり皷草　直久
僧房より左右方にさけ欵冬花　玄旦
山口て見るや蘇枋の花さかり　常成
きたいからみゆる槐や夏木立　同
葉ハつきて花きれ物か夏木立　直久
夏木立みしかきや山の腰くさひ　同
時に今わふさかゝみのまつりかな　同
神木とわきてとりぬる榊かな　同
はひきかや丸は柳の夏木立　重勝
戀忍ぶ花もやまこねかきつをた　常成
見て花を折や手まりのつきあかり　直久
空飛いこまを玉喬かくつて鳥　催笑
跡先にこれか初音かほとゝきす　索嘲
咲花の香もよしたかきあふち哉　直久

螢火はいまぬそとまれ馬面草　政長
月によをひつしきつたる螢かな　頼勝
いわぬ國はわらしとよ芦とらちまき　直久
色みへてうつるや小町をとり草　同
一入と得たりわしたの花の露　催笑
惣領といはんきのこや早松茸　同
口たゝくはいとはしたなし姫くひな　重勝
あふき出す風やかなめの穴かしこ　直久
ひかひ初る扇や風の神おろし　常成
作りようもひみつのあるか東寺瓜　催笑
多のことひやしてくふや冬至瓜　直久
飼鳥のくひをしめする鵜匠かな　同
くらべてや鳥は物かはの鮎の味　同
ちこくやなにをつるをすくへ談義坊　同
つはめるはまたいたいけの蓮かな　同
絲薄かたよるは風の手しろ哉　同
茶碗をもふき立てにけり風呂のすき　重勝
ふれ〳〵といふあま乞の踊かな　同
こゝりにましまぬそ白き蓮の飯　常成
いつちしみたふりい題目をとり哉　同
かろく置くも草木はをもし雨露の恩　催笑
穂まれあらは物にますはの薄哉　索嘲
咲亂る野やひやうらんの花軍　直久
盛久は花の名によきしめ野かな　云拙
とりにかすは思つめなき小鷹哉　直久
逸物はなにも鴨とる小鷹かな　玄徹

あみにゞるあはすれ物や秋の鮎　常成
落くるはおもしろやなゝ鮎の魚　直久
月を見る我や南方むく世界　同
世界をやめくりて月の晝やすみ　常成
いつか〳〵いつかと待て今日の月　催笑
水に影ちかまさりする月見哉　直久
入るたひにれとせぬ月の弓返し　常成
雲の帶ひくなよ月のふなねつみ　同
月の名や天上にての御元服　同
あらいたてしいもの子よひや月の良　直久
ひとり住む頃や名月の十三夜　催笑
さきの月れ跡にくはしのよよひ哉　直久
餘の花はたけもさゝしや菊の淵　常成
木も(欠)あればそ秋にはせ紅葉　同
つらなるは曾我兄弟か菊の枝　云拙
露の玉をかい手の筋や百掬　催笑
こけむすはもちの木山のこしき哉　直久
あかり行時雨や雲のあしりこき　同
ふりことも定る冬の時雨かな　常成
木から先かくはしるしの落葉哉　同
霜にあひて虫の音も出ぬ枯野哉　直久
月をまたつきくたき見る氷かな　同
薄氷きんはんなれや香の池　常成
涙のあは水の衣のしたき哉　同
木のは衣うへやわらしの玉の聲　同
雪を丸しあられになすや御てんやく　不及

文字にもゑひの聲あり冥酒　常成
火性なる男にみゑな雪女　云拙
田子の浦やそこさへ見事ふしの雪　不及
折る聲をひゆるや竹の夜の雪　旦久
羽の上にふるや鶯のふもと雪　同
寒き日は人までふるふ粉雪哉　常成
鈴鴨の羽をふる音やみこの海　催笑
火となりて飛ふすみとりのこたつ哉　直久
極月の立や茶ならて年のつめ　心狹

○鶏鶴集

廿四年
親に二十四孝いたさんことし哉　催笑
門松やはも立そろふ午の年　同
廿五年
年は五々までつたい門のかさり哉　同
淵となれ和歌のことはの花の春　同
遲く鳴は山のおくてか田長鳥　同
折にきと人にかたるな上臈花　旦
うはの空に見る雁かねや戀の文　云笑
玉子なりな柿は世界圖くし哉　馨昌
雨ははらり露はほろりと落葉哉　催笑
まめいたをいはゞ銀花のつはみ哉　同
かふせんの恥を雪や佗茶の湯　不及
寒中れ間日はこたつの炭火哉　云笑

○中山集

包井も開くや水の花の春　直久
引のこも松は國土の子日かな　道喜
みねと香に知るやふんしやう園の梅　索嘲

花は雪にふりをかへても見物哉　直久
目かゆかは心もくたく落花哉　心狹
揚貴妃の花見も王の位哉　直久
八宗も願ふ本尊やはとゝきす　索嘲
我心つれてやちうに飛はたる　索嘲
のけそつて長刀鉾はみもの哉　直久
夕立の作者もちひのたくひ哉　政長
扇箱のはこらや是も風のかみ　直久
數珠玉のなるや百八盆の比　同
扇なりに行くや末ひろかりの聲　政長
かたふくや思ひきられぬ月の劔　玄旦
色あけか時雨し山の夕日影　政長
栢木のゑも人をみたす落葉哉　直久
わさまにもならぬは富の太雪哉　同
冬の部に入る鶯の歌もかな　索嘲
年の内に立やつはみの花の春　政長
去年きくも此はとゝきすの初音哉　索嘲
てる日にや水の面も土用はし　催笑
木からしはほなへぬけくる寒さ哉　同
門松や年涙のこすみはしるし　政長
みすもわらす見もせぬ花は目星哉　同
ゆて汁の露もまたひぬ粽かな　直久
栗生姜いつれか先に沖鱠　心狹
行やらて山路にひろふ木の實哉　我笑
音せぬは地にぬき足か春の雨　玄旦
波の花のかみなやたゝし花の涙　直久

しんあらいとくたて花の瓶哉　催笑
かさり松や宿をならへて門の前　直久
春の門やかはらぬ色の松二本　催笑
ひとり猶道たつねみん佛の座　同
年玉は先月をうるあふきかな　之因
主從の御ちきりなり具足もち　可隱
飯る厂けにや故郷は雲井のよそ　即休
つちに水よし〳〵かゝるあまかへる　心狹
猶々飛やあはれ胡蝶の一遊ひ　催笑
筒に入よ八千代をこめし玉椿　同
またか〳〵よし〳〵少はをそ櫻　直久
松に花言語同斷かゝること　即休
色にそひやとんちやくれ思ふかみ山　正長

卯の花や山はとゝきすさそひ貞　直久
よゝことのかりの親子や藪の竹　催笑
竹いきれ子程のかたみ有へきか　催習
ひし竹や一寺の賞翫齋の茶　之因
夏さらし宇治の里にもつきにけり　可隱
時いたつて今霧鮎しる鵜川哉　直久
鮒のすしもやかてなれぬるこゝろ哉　催笑
ぬす人は夜こそちきれうり畠　心狹
新茶にや戀しき昔のものかたり　之因
けふりくるふしはなさせそ玉まつり　直久
皆頭にもるゝことなしかけ踊り　催笑
風の尾花波にたくへてをひたゝし　即休
かしこうそ長いきをして若たばこ　直久

みる月やこゝをさることと遠目金　同
順逆の二つや空と水と月　之因
月待は只手をあけて舟よのふ　即休
影はふし月より外は友もなし　催笑
つち音や世をうつせみの唐衣　催習
冬かれや木の實のこりて葉はしらを　催笑
雪の朝けにやふりにし物語　即休
御簾のあやめ是も宮のことくなり　之因
かくれなし問て何せう丹波栗　催笑
飯雁とゝまるましやいてたゝん　就睡
一夜二夜みよとて小町をとり哉　同
入月や山は朝けにかくれかさ　同
風は目にみる文よりや夏坐敷　之因

多來てはこたつを老のはたし哉　同
たて花にてまりの花にうけなかし　任出
梅か香や花のふくろのなかんつく　同
若はへのかけやみとりの重菊　知清
安樂や觀音草の花見月　同
まふれてよ心の花のちりはこを　同

〇懷子

春の立あしたの原は雜煮哉　催笑
照星に和光やそへ木梅の花　同
風の上もありか定よちりつはき　同
色よりも香こそあつはれ沈丁花　同
紅とくやあひ見るけふの花袋　云笑
花の比三芳野の雁やいるまかふ　雖云

月やとれとはぬるさきの菊れ露　催笑
夏引の手ひきの茶をや風芦のすき　同
三年息追善に
實三とせなるてふ桃の手向哉　同
小春待花はむかしの茶の香哉　云笑
うつくしき鶯や飛紋波のあや　同
老となるもめてんわさくれ暮の月　雖云
○大井川集
手の風も歌にや　らゝ試筆哉　即休

一誹諧の集に入付句の事
○鷹筑波集
時々みまふ景清の事
みれは地獄の繪こそ有けれ
塩やきも髪ゆふ雨の五月かな　即休
初なりや三つ四つふたつからす瓜　同
横はひや道まかふ蟹霧の海　同
○櫻川集
心いかに一句のぬけから蟬の聲　即休
うなひ子や打物かたらひ雪つふて　同
鶯を籠に入つゝ外にをき　宮本善左衛門孝庸
鬼面を屏風のそはにかけ置て　同

座
一荷に持やこの田子の浦　同
春のものとて遊ふ人々　同
まうどうものと誰も言ふらん　同
見物の場はひつしとつまりけり　同
しやうやうふれうと笛を吹なり　同
身にしめてするま男のむすにて　同
車座にてやうたう聲々　同
あせの如くすいきの涙こはれ落　同
○玉海集
かたきをうたず腹を立たる　同
○新續犬筑波集
をしまぬといふも名殘は過分にて　心狹事馨昌
座敷を能の樂屋にそする　同
駿河路をとはる辨當挾箱　同
起きもせす寢もせす夜半にす咄　同
官途をはたび〳〵しをれ座頭にて　同
貴き智者のとける聞法　同
清經はとふらはれつゝ出られて　同
いかはかりかはかはる大將　同
もめん糸よるの庭鳥打はふき　石川傳左衛門如云
あはれりんげんいでゝくふ芋　如云
我をやをころせし針を又このみ　直久
ひするや君か付指のさけ　心狹事馨昌

昔をしのぶ今の政道　後つれはいとゝりんきの深くして　催笑

〇施鈍　屑集

詠せし歌の心やさしき　ゆるし申花は一枝折り賜へ　催笑

やねの上にやいる矢あらん　齋宮に立しは花のすかたにて　同

させる疊の手きはもりよき　みことなは腰の扇の地紙にて　心狹

うつゝまふつは獨りしてそる　山からのなれてをもしろ籠の内　同

志渡のわたりにせかきする比　勾當のもてる孫の手身に入て　催笑

したん顔なる傍輩の中　鷹へやのあたりに犬もあまた居て　同

なかれたつるはうき部屋の内　君を待よはの蠟燭風をいたみ　同

火の用心をふかくつゝしむ　さはり有女ハ人にちかよらず　同

氣たてはそ終のよるへに思草　すき者ものねて品さため　同

薪せをふやかすむ山人　里主の歌のさまこそいやしけれ　同

もてる扇はいつもわたらし　けさくふや夜川に取し網の魚　同

ぶつ〳〵と露ふくるまでつふやきて　わくわま酒はなかれ過やせん　同

あられもしろの糸竹の聲　唐はまを子供やひたとまはすらん　同

よにたのもしき者は武士なり　温藥を上手れ醫者やつかふらん　同

山門の衆徒の心根いかはかり　まゝにならぬは加茂川の水　同

此神は物たゝはしくをはしまし　乘うちにする馬はうこかす　同

酌とりなから歌をよむ袖　木曾殿の最後を聞を痛はしや　同

待かねぬるやてかはりの比　急たつ絹に物さしとりそへて　同

汗をたらしていたす氣遣ひ　井のもとの水さらへつゝ掃除して　同

夜畫をわかてやふかくねふるらん　むねたかく大引物やわけぬらん　玄旦

うたふうたしと碁をや案する　砂にうもるゝ沖のはまぐり　同

惡にはひかれやすくこそおれ　三四まて通るかるたは大事に　同

只それ〳〵の道のたしなみ　口相のことはき馬をいとめ兼て　索嘲

馬方は駒引錢を秘藏して　同

治まりし世には武略を次にして　同
遠島の波に浮名もなかされて　同
酒宴半はにふつと立そて　同
花よりも笛を一入すき給ひ　同
色好みなれとも今はつかはれて　同
露にしつほりぬるゝ裝束　同
をくはふとんのしたの下紐　同
且那は精進かたくめさるゝ　同
是非と心に懸る後の世　同
女のゆもじしめつけてする　同
後家にもひかれし黒染の袖　同
衣かへつゝ新枕せり　同
いふにいはれぬ嫁入の体　同
奥の坐敷に茶具かさり置く　同
書きしそとばの數ハ何本　同
盛久のきりへさしの舞の袖　心狹
つゝしをかけによするない鳥　直久
殘りすくなき庭のくし柿　同
それし鷹月の夜わけに居わけて　同
あたらんと寄りし火燵の炭をなみ　同
霜月は一向寺は時めきて　常成
やくそくもおもふかひなき宮仕へ　同
いやなれと是非もなく〳〵逢夜半に　直久
十念をさつくる度の目くはせに　常成
惡僧も戀には恥つる心ありて　重勝
髪もまたずんとみしかき比丘尼落　同
むかへはしんきこのまゝ鏡　直久
はたこやはとまれ〳〵の女とも　同
眞綿にちりは付やすきもの　同
謀のみいたゝ楠　同
息もつきあへぬ世の中のわぎ　同
壇俵心はる〳〵持はこび　同
ともふまはらぬ心闘の戸　同
色青々としたるかるかや　同
車の音は引もちきらす　同
哀さはいふにいはれぬ歎にて　同
先つ口切りはしはしのへぬる　同
ゑわすれぬ別を何と須磨の浦　直久
ねときもしらぬ鳥れ赤さか　常成
山をかきふしは蒔繪の色もよし　直久
舟板のわれをますにやさしぬらん　同
浦邊の堂を建立の時　同
はやかりしかけりの舞の笛ふきて　同
山の奥にも立るかま風呂　同
浮世をはのかれぬれ共茶の湯して　同
立波の舟を鹽瀬に乘すへて　同
した〳〵かに持たるかまて手を切て　同
井のもとの水をつるべの縄をふとみ　同
はさみ捨てたる丈けの黒髪　同
桝樽くれしを客は隙入て　同

次第にも足はをもくや成りぬらん　　同
なきあとをとふてふ袖の殊勝さよ　　同
居たけたかにもなる淨土宗　　同
蓮の根やいかにもさつと洗ふらん　　同
しつけするかのはらんべの親　　同
あそこもこゝも石をわるなり　　重勝
二階座敷をきらふやとかり　　大森友清
にこり盃のむは口をし　　重勝
○佐夜中山集
公義つとむる春は來にけり
うたるゝ老の名のみ殘れり
やぶれすのこをつくろひにけり
かすみすりつゝ筆を手に持つ
をせともはかのゆかさりし舟　　同
人ある人に身をはうりつゝ　　同
はり上けて說ける談義せめる聲　　同
うみは殘りてみゆるはれもの　　同
愛らしき小袖をとくと縫立てゝ　　同
双六はをくれをうつかゐるものにて　　上村之因
足立たぬ人も有馬の湯に入て　　同
不覺をはかくも喧嘩の和談して　　鳥取催習
ふる雪のみの白小袖きそ始　　同
飛なきの鶯いつら軒の雨　　同
燕も和國の春に又候や　　鳥取催習
誰々を花見のつれにさそふへき　　同

今日のみと春れひがんの寺參　　松永玄且
わかる謠のふし面白ろし　　鳥取知清
あしたとり〳〵鶯の聲　　因幡清
晴やらぬ氣分やいはゞ八重霞　　鳥取衆
のぼる夜道をすこし休まん　　同幸齊
月出て市路に出て給べ醉て　　同
鶯聲になひつくをひつ　　上村之因
余のことなしに戀ひしとばかり　　同可隱
なにといひてかなびかせん人　　鱸催笑
夕月に鳴くは千鳥の二つ三つ　　上村之因
さはることとありとはさても曲もなや　　同
なんても春は樂のらくせん　　同
やねの上にもかけのはりはし　　同
命の內にあつま下りを　　同
立事やすき法の花かめ　　同
竹のはの盃のむや花の蔭　　同
をさなきは春の日やりと笛吹て　　同
呑める藥のまはり遲き日　　同
仰きて峰また遠き富士詣　　同
松虫の音にそゝのかさるゝ　　上村之因
かつらきの峰の雲かのよりくし　　鱸催笑
あはぬ夜のつらさを筆のせゝりかき　　上村之因
糸櫻柳にそへて送り文　　鳥取衆
ゑにしたゞ鶉の尾より短くて　　鳥取即休
妹かりするはたつたひとり身　　上村之因
身に疵ひとつ二たこゝろかゝ　　同
思ふをもつれて花見花をやり　　同
神のつけや白羽のやかて立ぬらん　　同
此寺の同宿してはくらすまじ　　同

涙にくれてくらき墓原　　鳥取　幸
きる物はかたまへさかりいつにても　　仝　任
行やらて山路の景をなかめ入　　同　催
持ちし火縄に火をつけてたへ　　同　幸
挨拶の詩や案し煩らふ　　齊
うそ冷しき立田山こゑ　　出
一亂の以後は系圖もしれさりき　　習
五十年なからふるとも程もあらじ　　齊
うつとしき家居は是非も候はし　　因
鳥羽田も雪になる横大路　　笑
子はそれ〳〵にひとりはみする　　因
はめて昔をしのぶあやつり　　習
すでに早をもひく須磨のうら悲し　　因
まゝしき中にとたつおさなひ　　上
しばしはこゝに腰をかけはし　　村
休らひて且那はわれに旅の空　　同
打むかふ名所の致景まれかれに　　之
雨風に三室の岸のくつれ口　　鱸
かくひとなりしもとはみなし子　　上
をろかの我はいさ天の道　　之
箱のもみにもかくる蜘の圍　　催
河岸にいそくや蟹の穴かしこ　　之
野の草に牛は牛つれ馬は馬　　催
給ふ茶は舌のさきから味ひて　　同
　　之

拾遺記終

大正三年十月十六日印刷
大正三年十月廿六日發行

編輯兼發行者　佐伯元吉　鳥取縣東伯郡倉吉町大字東町五拾四番屋敷
印刷者　由井源藏　鳥取縣東伯郡倉吉町大字東仲町四拾貳番地
印刷所　由井活版所　鳥取縣東伯郡倉吉町大字東仲町四拾貳番地

不許複製

○定價五拾錢

發行所　因伯叢書發行所
鳥取縣東伯郡倉吉町　研志塾内

大賣捌
鳥取市上魚町　電話三〇九番　振替大阪四貳六八番　横山書店
倉吉西町　電話一九番　振替東京六三〇五番　德岡書店
米子尾高町　電話一六番　振替東京一九五一番　今井書店

28
240

128
240